

国立

国会

図書館

月報

NATIONAL  
D I E T  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2022.9/10



学研都市の思い出 森見登美彦

特集 関西館20周年

地図で見る関西館 けいはんな学研都市のいまむかし

国立国会図書館で働いています Season2 (終)

# 国立国会図書館 月報

NO. 737/738  
SEPTEMBER/OCTOBER 2022

CONTENTS

- 1 『日本昆虫大図鑑』—昆虫の探求—  
今月の二冊 国立国会図書館の蔵書から
- 4 学研都市の思い出 森見 登美彦
- 10 特集 関西館20周年  
12 変化でひもとく関西館の20年  
16 座談会 関西館よもやま話
- 22 地図で見る関西館 けいはんな学研都市のいまむかし
- 28 国立国会図書館で働いています Season2 no.10 (終)
- 32 国立国会図書館関西館開館20周年記念 第30回関西館資料展示  
巨大書庫には何がある? —関西館資料展示を振り返る—

27 館内スコープ  
表紙は雑誌の顔です

34 本屋にない本

『ミュオグラフィ』 21世紀の透視図法

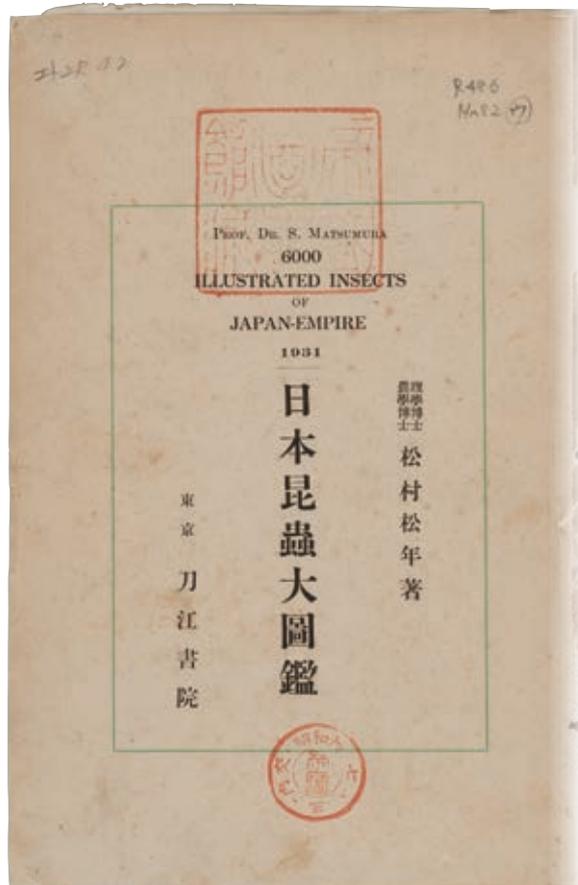
35 NDL TOPICS



表紙：  
「京都知恩院」川瀬巴水 画  
渡辺画版店 昭和8(1933)年 1枚  
26×39cm  
(『川瀬巴水版画集2』所収)  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2586550/65>

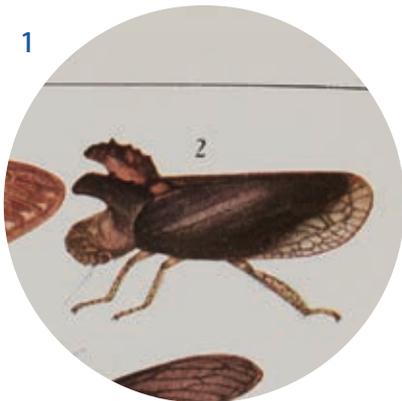
# 『日本昆虫大図鑑』 一昆虫の探求一

小針 泰介



## 日本昆虫大図鑑

松村松年 著 刀江書院 1931 1497+191p 図版10枚; 23cm  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1145547> (モノクロ画像)



2. *Ledra-auditura* Wk. (♂) ミミツク

『日本昆虫大図鑑』はわが国に生息する昆虫を収録した図鑑で、昭和6(1931)年に刊行された。本書は約六千種の昆虫を分類別に収録しており、収録される昆虫には和名、学名、挿図、解説、分布等が記載されているほか、一部の昆虫については巻頭にカラー図版が掲載されている。著者は昆虫の和名の命名に尽力し、現在も刊行が続く雑誌 *Insecta Matsumurana* を創刊するなど、日本の昆虫学の草創期において、その発展に大きく貢献し、日本昆虫学会の会長を務めた理学博士・農学博士の松村松年(まつむらしようねん、1872-1960)であり、松村は本書の刊行当時、北海道帝国大学で昆虫学教室を主宰していた。本書の刊行に先立ち、松村には『日本昆虫学』、『日本千虫図解』(全4巻)、『続日本千虫図解』(全4巻)、『新日本千虫図解』(全4巻)、『大日本害虫全書』(前・後編2冊)など昆虫に関する著作が既に多数あり、本書に掲載される挿図のうち約半数は本書以前に刊行された著作等から転載されたもの、約半数は本書で新たに発表されたものである。

1はカラー図版に掲載される「ミミツク」(ミミズク)のオスである。ミミズクといっても鳥ではなく、昆虫である。このカラー図版には学名が付記されており、巻末の検出索引から「ミミツク」の解説が掲載されるページ



ミミツク（ミミズク）の名前の由来である耳状の突起（上図矢印）も緻密に描かれている。



3がメス、4がオスのタグメ。



松村松年の肖像  
『松村松年自伝』造形美術協会出版局 1960<請求記号 289.1-M357m>

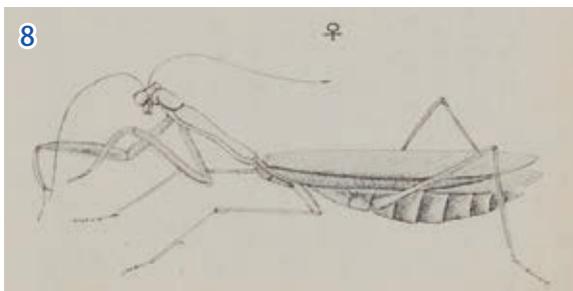
ジを探すことができる。解説には、「体上は黄褐、体下は黄色。全面に褐色の顆粒を散在す。前翅は半透明、脈上に顆粒多し。脚は側扁、前胸に耳様の突起あるを以て、この名あり。体長四分半・五分<sup>①</sup>。これはカシハ、ナラの葉裏にありて、その液汁を吸収す。その数、多からず。」と記され、分布は本州、四国、九州である。2は解説に付されている「ミミツク」のメスの挿図である。これらの図からは「ミミツク」の名前の由来である前胸の耳状の突起が見て取れる。

3及び4は「タグメ」である。解説には「体は暗灰色。前胸背の後縁に一横溝あり。前翅は革質、後翅は黄白にして、翅底は黄色。中後の両肢に暗褐紋を装ふ。体長一寸八分から二寸。これは本州に普通なれども、北海道には稀なり。幼魚の害虫なり。時に蛙を捕へ、その血液を吸収す。多く水田に住するを以て田亀の名あり。一名これを河伯虫（河童虫）とも云ふ。」と記され、分布は日本全土である。本書が出版された昭和6（1931）年当時は、本州で普通に見られるとされているが、「環境省レッドリスト2020」によれば、現在ではタグメは絶滅危惧Ⅱ類に指定されており<sup>②</sup>、絶滅の危険性の増大が懸念されている。

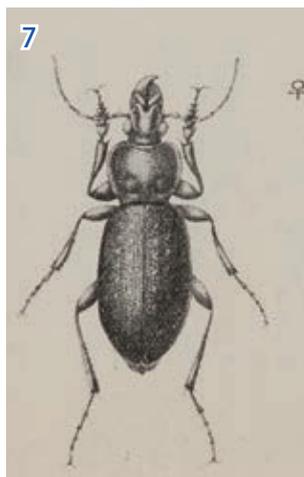
5は「ヲガサハラセセリ」（オガサワラセセリ）である。解説には「翅は黒褐、斑紋は



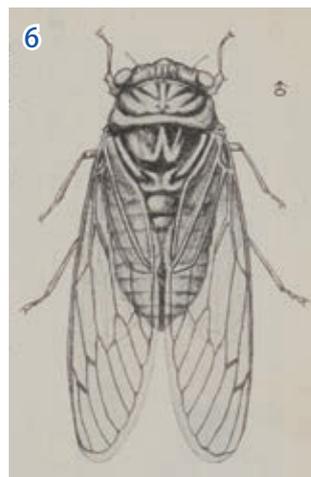
ラガサハラセセリ……………(四六一)  
*Parnara ogasawarenensis* Mats.  
 翅は黒褐、斑紋は白色、半透明。後翅の縁毛は  
 灰白。開張一寸内外。これは小笠原島に産すれ  
 どもその数餘り多からず。  
 分布——小笠原島。



ナミカマキリ



エゾオサ



エゾゼミ

1 1分は約3.03ミリメートル。

2 「環境省レッドリスト2020」 p.22 環境省ウェブ  
 サイト [http://www.env.go.jp/press/files/  
 jp/114457.pdf](http://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf)

3 矢後勝也「海洋島で種分化したチョウの謎を解  
 く—小笠原固有のチョウ「オガサワラセセリ」—」  
 東京大学総合研究博物館ウェブサイト  
[https://www.um.u-tokyo.ac.jp/web\\_  
 museum/ouroboros/v25n1/v25n1\\_yago.html](https://www.um.u-tokyo.ac.jp/web_museum/ouroboros/v25n1/v25n1_yago.html)

○参考文献

『松村松年自伝』造形美術協会出版局 1960  
 pp.178-184, 333-338<請求記号 289.1-M357m>

「松村松年先生追悼の詞」『昆蟲』29(1) 1961.3  
 pp.1-3 [https://dl.ndl.go.jp/view/download/  
 digidepo\\_10649982\\_po\\_ART0005663891.  
 pdf?contentNo=1&alternativeNo=](https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10649982_po_ART0005663891.pdf?contentNo=1&alternativeNo=)

※ URLの最終アクセス日：令和4年6月7日

※ 引用の旧字は新字に、旧仮名づかいはママと  
 しました。

白色、半透明。後翅の縁毛は灰白。開張一寸  
 内外。これは小笠原島に産すれどもその数余  
 り多からず。」と記され、分布は小笠原島で  
 ある。このオガサワラセセリは著者の松村ら  
 により父島で発見され、新種として発表され  
 たものである。<sup>(3)</sup>  
 このほか、本書にはエゾゼミ(6)やエゾ  
 オサ(7)、ナミカマキリ(8)等、多種多  
 様な昆虫が精緻に描かれている。今日では、  
 多数の昆虫図鑑が刊行されており、その多く  
 には昆虫の写真が掲載されているが、丁寧に  
 描かれた本書の挿図には写真とは異なる魅力  
 があり、その魅力は刊行から90年余を経た現  
 在においても色あせていない。昆虫を分類別  
 に整理、解説し、挿図を付した本書は、日本  
 の昆虫について体系的に知ることを探求した  
 労作であるといえよう。

# 学研都市の思い出

森見 登美彦

学研都市を「発見」したのは中学生の頃である。今から三十年前のことになる。

当時、私は生駒市の長弓寺に近い新興住宅地で暮らしていたのだが、日曜日の朝など、よく父といっしょにドライブへ出かけた。近隣の住宅地をデタラメに走って、新しく見つけた横道に入ってみたり、朝の公園を散歩したり、喫茶店でジュースを飲んだり……。

たいして遠出するわけではないけれど、自分では「冒険」のつもりだった。

ある日、押熊から国道163号線のほうへくだっていくと、坂下の交差点から北へ向かって延びる道路を見つけた。それはきれいなアスファルトの道で、ゆるやかにカーブしながら緑の丘を越えていく。

じつに良い感じの、いかにも好奇心をそえられる道だった。

「あの道はどこへ通じているんだろう?」

「行ってみよう!」

そのときのワクワクする感じは今でもハッキリおぼえている。

当時はまた学研都市へ向かう車もほとんどなく、そのアスファルト道路を走っていくのは私たちの車だけだった。あたりがしんと静かになった。道の両側には整然とした並木が続き、丘の上に広がる日曜日の空は青かった。

その道の先にはどんな風景が広がっているのだろうか?

その日、丘を越えた先で私たちが見たのは不思議な空間だった。

2022年現在、学研都市もすっかり様変わりしてしまったので、当時の風景を正確に思い出すのはむずかしい。

とにかく、なんにもなかったのである。なんにも！

どれぐらいなんにもなかったかというと、コンビニエンスストアもなく、レストランもなく、ショッピングセンターもなかった。企業の研究施設群もなく、けいはんな記念公園もなく、もちろん国立国会図書館関西館もなかった。光台の住宅地は宅地造成されたばかりで、ほとんど家は建っていないかった。未完成の道路はあちこち封鎖されており、祝園方面へ抜けることはできず、光台住宅地から学研登美ヶ丘駅へ抜ける道もなかった（そもそも近鉄けいはんな線がまだ開通していない）。どちらを向いても、西部劇の荒野のような空っぽの土地ばかりで、目に入る建造物といえば、「ATR（国際電気通信基礎技術研究所）」と、「けいはんなプラザ」だけだったのである。

「まるで『世界の果て』みたいなところだ！」

と、私は衝撃を受けた。

そして、いつべんにこの不思議な場所が好きになった。

その日は「けいはんなプラザ」の中をぶらぶらするだけで帰ったのだが、それからというものの、私は何かという学研都市へ出かけるようになった。

こうして文章を書いていると、いろいろな思い出が浮かんでくる。

光台住宅地の一角にある建物（現在は「セブン・イレブン」になっている）の簡易食堂でうどんを食べたり、けいはんなプラザ前広場にあるモニュメントから夜な夜な発射される緑色のレーザー光線を見物しにいたり、けいはんなプラザ内の喫茶室で牛肉のピラフ

を食べたり（これは美味かった）、同施設内の売店でステイヴン・キングの小説『I』のペーパーバックを買ったり……。

父とのドライブで出かけることが多かったが、ひとりで自転車をこいで出かけることもあった。酔狂としか言いようがない。アップダウンが多いから、往復するだけで二時間以上かかる。しかもわざわざ出かけたところで、とくに何もすることはない。けいはんなプラザをぶらつき、自動販売機で買ったジュースを飲んで、持っていた本をばらばらめくって、帰ってくるだけなのである。

当時愛読していた村上春樹の本を持っていき、突然の雨に降られて文庫本をびしょびしょにしてしまったこともあった。

どうしてわざわざ学研都市で村上春樹を読むのか？

「そういうことがしてみたいお年頃だったんです」としか言いようがない。

そのとき濡れてバリバリになった『1973年のピンボール』は思い出の一冊として、今もまだ仕事場の書棚に保管してある。「三十年前の学研都市に降った雨で濡れた本」と思えば、なかなか味わい深いものがある。

けいはんなプラザ内の売店で買ったステイヴン・キングの分厚いペーパーバックも、三十年間、未読のまま大切に保管してある。

「関西文化学術研究都市」の建設意図や沿革について、当時の私は何ひとつ知らなかった。今でもほとんど何も知らない。

そんなことよりも重要なのは、その「世界の果て」みたいな未完成の街が、私の思春期を象徴する場所になったということだ。まあ、学研都市の側からすれば、「そんなの知っ

たこつちやない」であろう。関西文化学術研究都市推進機構は、ひとりの少年を大人にするために設立されたわけではない。

ちょうどバブルが崩壊したばかりだったせいも、私が足しげく通っていた十代の頃、学研都市にはあまり変化がなかった。建物はA T Rとけいはんなプラザだけ、という状態がずっとぶん長く続いたような気がする。「さあ、これからだぞ！」というところで、ふいに時間が止まってしまったかのようにだった。

いつ出かけていってもほとんど人の姿はなく、建設予定地は建設予定地のまま、道路は行き止まりだらけである。いたるところに世界の綻びが剥き出しになっているようで、私の妄想は膨らむ一方だった。

「あの道路を封鎖している壁の向こうには異世界がある」

「A T Rやけいはんなプラザは『世界の果て』を調べる観測所なのだ」

2010年に発表した『ペンギン・ハイウェイ』という小説は、そんなふうに学研都市をさまよっていた思春期の頃の感覚を、できるだけ緻密に、正確に再現してみたいと思っ  
て書いた小説である。

思春期の頃、私は「世界の果て」を見たいという情熱に取り憑かれていた。

それが「(地理的に) 遠くへ行きたい」ということであれば、そのような情熱に取り憑かれた少年はいずれ、エベレストを登頂したり、北極圏を犬ぞりで旅する冒険家になるのだろう。しかし私は「遠くへ行きたい」なんて思わなかった。「遠くへ行っても意味がない」とさえ思っていた。「世界の果ては近所にある」というのが私の信念だったからで、父とドライブするとき、通学ルートを歩いているとき、自転車で住宅地を走るとき、いつも私は「世界の果て」(のように感じられる場所)を探していた。私の十代はそのような孤独な情熱の追求に費やされた。

最近になってようやく腑に落ちたような気がするのだが、「世界の果て」というのは私の心の中にしか存在しない場所である。そこへ行きたいならば、自分の心の中へ入るしかない。つまり思春期の私をとらえていた「世界の果て」への憧れは、「自分の心の奥深くを見てみたい」という欲求だったのではなからうか。

そう考えれば、未完成の学研都市が私を惹きつけた理由も納得がいく。

当時の学研都市は、私をもっとも孤独になることができ、もっとも自由に妄想できる場所だった。未完成の道路の先や、建設予定の荒地の向こうに、いつでも私は「世界の果て」を夢見ることができた。

しかし実のところ、そうやって私が見つめていたものは、自分の心の奥深くにあるもの、説明しようのないヘンテコなもの、自分を自分たらしめている謎みtainなものだったのだろう。

未完成の私は、未完成の学研都市をさまよいながら、「自分」という存在の不思議さをジーンと観測していたのだと今では思う。

京都の大学へ進学して以降、学研都市を訪ねることはなくなった。

ちよつぱり停滞しているように見えた学研都市の開発は、その頃からふたたび進み始めたようである。

私が大学に通っていた七年間に、商業施設や研究施設が増えていき、2002年には国立国会図書館関西館も開館した。2002年といえば、私が京都の四畳半アパートの一室で、デビュー作『太陽の塔』をせっせと書いていた頃だ。

卒業後、就職先に国立国会図書館を選んだことには、新しくオープンしたばかりの関西

館が学研都市にあるという事実も多少は影響していた。

不思議な御縁だなと思って、ちょっと嬉しかった。

しかし学研都市で働きだしてみると、そこはもう、かつて私がたびたび訪ねていった不思議の街ではなくなっていた。「世界の果て」はどこにもなかった。

大学に通っていた七年の間に開発が進んだからでもあり、今や学研都市へ通うのが日常になってしまったからでもある。しかし一番大きな理由は、もはや私が「思春期の少年」ではなかったからだろう。



### 森見 登美彦 氏

1979年、奈良県生まれ。京都大学大学院農学研究科修士課程修了。

2003年、「太陽の塔」で第15回日本ファンタジーノベル大賞を受賞しデビュー。2007年、『夜は短し歩けよ乙女』で山本周五郎賞を受賞。2010年『ペンギン・ハイウェイ』で日本SF大賞を受賞。ほかの著書に『四畳半神話大系』『有頂天家族』『きつねのはなし』『新釈 走れメロス 他四篇』『聖なる怠け者の冒険』など。

特集

## 関西館

## 20周年



関西館長 伊藤 克尚

関西館は、平成14（2002）年10月に、京都、大阪、奈良の三府県にまたがる関西文化学術研究都市に開館しました。緑豊かなこの地で活動を始めて今年が20年目です。

電子図書館事業は関西館の役割のひとつですが、当初約3万冊だったデジタル化資料の提供数は現在300万点を超えています。また、書庫の増築、視覚障害者等用データ送信サービスの拡大その他、この間の関西館の様々な活動は着実に成果を挙げてきました。しかし、これらは常に改善が必要な現在進行中の事業です。また、インターネット等で公開されている有償の電子書籍・電子雑誌の収集など新たな課題も待っています。

開館20周年は一つの節目ではありますが、関西館では、引き続き職員それぞれが工夫しながら、より良い図書館サービスをみなさまにお届けできるよう、取り組んでまいります。



# 変化でひもとく

# 関西館の20年

関西館では、設立当初から20年目の現在までの間に、さまざまな変化がありました。その中から特徴的な事業、特に力を入れている事業等を紹介します。

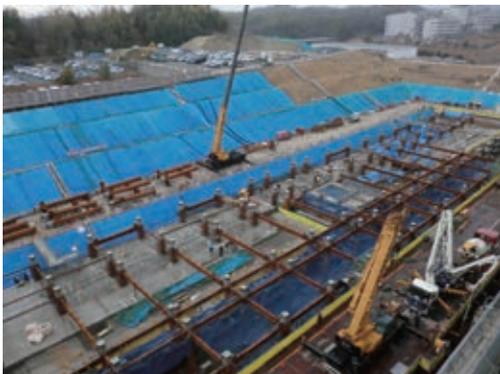
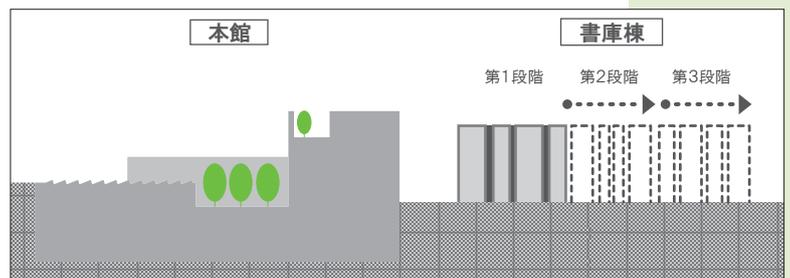
## 書庫棟の建設 Construction of the Storage Annex

国立国会図書館には、国内で刊行された出版物を収集し、永く保存するという重要な役割があります。年々増加する資料の収蔵スペースを確保するため、令和2(2020)年2月20日、関西館に新たな書庫棟が竣工しました。本館の南側に建つ書庫棟は、本を並べたような外観デザインが特徴的です。

地上7階地下1階建てで約500万冊を収蔵でき、関西館の収蔵能力は600万冊から1100万冊となり、東京本館の1200万冊と肩を並べるほどになりました。LED照明の採用や書物の落下防止措置など、資料を永く保存するための様々な工夫がなされています。

収蔵される資料はデジタル化済みの原資料などで、順次東京本館から関西館へ移送されています。

書庫棟の南側にはさらに用地があり、今後の書庫増設に備えています。



(上) 書庫棟工事風景 (右) 本館と書庫棟





関西館見学デー（平成23（2011）年の「親子でチャレンジ!和本づくり」）

## Cooperation with the Community

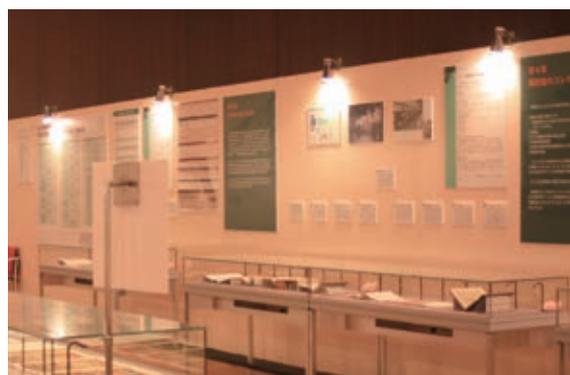
### 地域との連携・協力

関西館は開館以来、地域との交流を深め、関係機関等との連携に努めています。

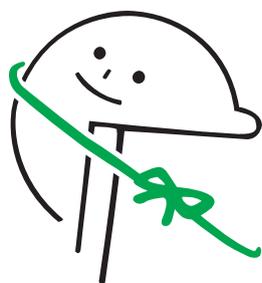
近隣住民や一般の方向けの講演会・展示会等のイベントの開催に力を入れており、平成16（2004）年から地元の「せいか祭り」に合わせて毎年「関西館見学デー」を開催し、開館10周年に当たる平成24（2012）年には関西地方の図書館の協力を得て展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」を開催しました。

また関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）の各機関との協力も重視し、「けいはんなビジネスメッセ」等のイベントへ出展者として参加するほか、平成24（2012）年からはけいはんな学研都市に立地する大学と連携して市民公開講座を毎年共催しています。平成28（2016）年には、総合閲覧室内に「けいはんな学研都市コーナー」を設置し、また、学研都市建設プロジェクト関係者の方々から都市の建設に関する調査報告書等の資料の寄贈を受け、平成30（2018）年から提供を開始しました。

新型コロナウイルス感染症拡大により、令和2（2020）年には中止になったイベントもありましたが、その後はオンラインや一部対面での開催を再開しています。



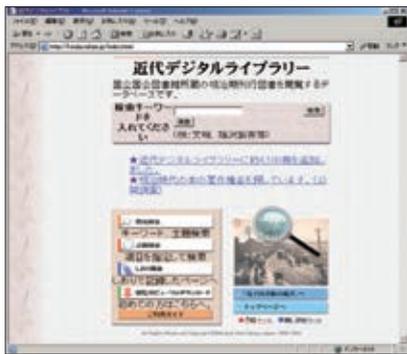
展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」



平成19（2007）年に決定された関西館シンボルマーク。関西館の多様な事業の広がりを表す地球と図書館を象徴する本にリボンをかけた姿を表したもので、利用者と関西館を「結ぶ」意味を込めています。



総合閲覧室の「けいはんな学研都市コーナー」



近代デジタルライブラリー トップページ (平成16 (2004) 年7月頃)



レファレンス協同データベース

Provide Information

Using the Internet

## インターネットで情報を伝える

関西館は、電子図書館事業の拠点でもあります。1980年代に関西館を設立する計画を立てたころから、関西館を総合的な情報処理センターとして電子情報発信の最前線とする構想がありました。

今日「国立国会図書館デジタルコレクション」に統合されている「近代デジタルライブラリー」(平成14(2002)年開始)や、日本国内のウェブサイトを集める「国立国会図書館インターネット資料収集保存事業」(WARP)(平成14(2002)年開始)なども、開始当時としては斬新な、関西館とゆかりの深いサービスです。

平成17(2005)年に開始したレファレンス協同データベースは、全国の図書館がレファレンス事例等を共有する仕組みとして普及し、調べ物をする利用者の方にも広く利用されています。

## アジア情報の提供サービス Asian Information Service

平成14(2002)年の開館当時、約11万冊だったアジア情報室の蔵書は、20年間で約50万冊と4.5倍に増えました。当時、アジア言語は既存システムでの表示が難しく、そのため別途構築していたアジア言語OPACも、現在は国立国会図書館オンラインに統合され、より検索しやすくなっています。

アジア情報室では、「AsiaLinks—アジア関係リンク集—」やアジア資料の調べ方等の情報発

信を行っています。最近ではYouTubeでの動画公開も始めました。近隣機関を訪問したりオンラインを活用したりして、アジア情報の探し方をご案内するガイダンスも活発に行っています。その他、開館当時から行っていたアジア情報研修やアジア関係機関懇談会に加え、アジア言語の書誌作成についての勉強会等のイベントを通じて、関係機関との積極的な協力関係を構築しています。



(上) AsiaLinks—アジア関係リンク集  
(左) アジア言語で書かれた雑誌や新聞の数々

## PICK UP! 1

「国立国会図書館デジタルコレクション」は、令和4(2022)年12月にリニューアルを予定しています。全文テキスト検索ができるデジタル化資料が大幅に増加するとともに、画像検索機能、検索結果の適合度順表示、閲覧している資料と関連する資料へのリンク表示、サイズ変更可能なサムネイル画像表示など新たな機能が加わります。また個人向けデジタル化資料送信サービスをご利用の皆様は、令和5(2023)年1月から、ご自宅等からご利用いただける資料がさらに増加するとともに、送信資料の印刷も可能になります。

同じく1月には、インターネット等で公開されている有償やDRM(技術的制限手段)が付されている民間刊行の電子書籍・電子雑誌の収集も開始します。新しいデジタルコレクションにご期待ください。

## 電子図書館

Digital Library



新たなデジタルコレクションでの閲覧画面イメージ

## PICK UP! 2

## 障害者サービス

Services for Persons  
with Disabilities



平成21(2009)年の著作権法改正により、国立国会図書館や公共図書館等は、著作権者の許諾なく既存の著作物を利用して視覚障害者等のための資料を製作・提供できるようになりました。これを受けて、平成26(2014)年から視覚障害者等用データ送信サービスを開始し、国立国会図書館、公共図書館、大学図書館等で製作されたDAISYデータ、点字データ、テキストデータについて、視覚障害者等の個人の方が直接または図書館を通じて利用できるようになりました。視覚障害者情報総合ネットワーク「サピエ」からも、これらのデータの多くが利用できます。

また、令和元(2019)年からマラケシュ条約<sup>\*</sup>に基づく読書困難者のための書籍データの国際交換(外国が

らの取寄せ、外国への提供)、令和3(2021)年から学術文献のテキストデータの製作を開始しました。今後は、デジタル化した資料の画像からOCR(光学文字認識)により作成したテキストデータについて、視覚障害者等用データ送信サービスを通じて提供することも予定しています。

令和元年には読書バリアフリー法が成立し、障害者サービスのさらなる進展が期待されています。誰もが図書館を利用しやすくなるよう、国立国会図書館全体で障害のある方々へのサービスに取り組んでいきます。

<sup>\*</sup>「盲人、視覚障害者その他の印刷物の判読に障害がある者が発行された著作物を利用する機会を促進するためのマラケシュ条約」。国境を越えて視覚障害者等用データの交換を可能とする条約で、日本では令和元年1月に発効しました。

(上) 視覚障害のある職員の業務風景

(中) パソコン画面上の文字情報を点字で表示する装置「点字ディスプレイ」を使い、指先で点字を確認しています。

(下) 手前から、音声読み上げと点字表示を行う情報端末、DAISYデータを再生するための機器



## 座談会

# 関西館 よもやま話

関西館の開館は2002年10月です。

開館20周年にあたり、関西館をよく知る職員に話を聞きました。「関西館準備室」にいたのち、関西館長も経験した職員と、開館時に関西館で働いていた職員2名です。

20年前からの変化はいかに……。 (2022年6月9日オンライン開催)



(右から)

黒木 大志郎 (関西館アジア情報課課長補佐)

木藤 淳子 (収集書誌部長 [前・関西館長])

佐藤 久美子 (関西館収集整理課整理係長)

### 関西館準備時代

—— 関西館準備室にいたころの思い出をお聞かせください。

**木藤** 関西館に運ぶ資料を決めるのが大変でしたね。

—— お三人とも、関西館東京分室の経験があるんですね？

**木藤** 東京分室は、東京本館で類似の業務を修業しておくということで、関西館が設置されてからも一部の職員が短期間、東京本館の分室で仕事をしていました。

—— 分室時代は何を？

**黒木** 入館は2002年の4月で、東京本館で複写業務を3か月間研修させてもらって、その後7月になって関西館に異動しました。

**佐藤** 同じくです。たまに関西館の写真が送られてきていて、床に電話だけが置いてある写真とか。

**木藤** 分室組は担当によっていつ関西館に移るか分かれていて、私は先発部隊で5月の連休明けに先に「さよなら〜」って関西館に行ったんですけど、そのとき関西館の事務室に行ってみたらなーんにもなくて、机がなくて。4月に赴任した人たちは最初は机もなかったという話で、1か月経ってもまだ準備が進んでないみたいで、当時文句を言った覚えがあります。

—その後、環境は整っていったんですか？

**黒木** 私は7月に行きました。パソコンは一応それなりにあって、同期で4月から行っていた人たちからは「この3か月で見違えたんだよ!」というのは顔を見るたびに言われました。

—最初に関西館を見たとき、若々しい目での第一印象はいかがでしたか？

**佐藤** 2000年に新人研修のときに関西に来た時点では、そのときは本当にただの穴だったんですよ。で、「ここが宿舎になる予定のところですよ」という野原を見せてもらったたりして

いたので、「あ、宿舎が建ったんだな」という感慨を覚えました。周辺にガラス張りの建物が多くて、「間違えそう」とか思いながら。

**黒木** 私は入館前に自分で個人的に1回見に行ったのかな、たしか。行ってみたら、3月で雪が降っていて、雪が舞うなりに周りに何も建物がないところに関西館だけが建っているのを見て、親と一緒にいったんですけど、親から「ここで本当に暮らすの?」って言われて(笑)。うちは南国の人間たちだったので、雪も降ってるわ山風冷たいわの中で息子をここに置いて行くのかというので母親がちょっと涙ぐんだのを見たときに、「あれ、失敗したかな?」と思ったことは実はあったんですけど(笑)。7月ぐらいに来たときには、そのときはかなり進化があって、「あ、3か月で人がいるような気配になってる、これなら安心かも」と思って元気に入っていった覚えがあります。

—竣工後の関西館の閲覧室の第一印象は？

**木藤** とにかくスタイリッシュという印象ですね。

—東京本館とは相当違いますが、利用者からは違和感の声はなかったですか？

**黒木** 開館当時は国立の図書館が珍しいということで、近所の方たちが来て「珍しい珍しい」で済ませてくれていたかもしれない。もの珍しさでみなさん見て、「あ、国の図書館ができて。楽しそうだね。」とおばあちゃんたち

## 段階的な変化

—「関西館 この時点でフェーズが変わったな」と実感する時期はありましたか？

**木藤** 私は開館前後(2002年から1年3か月)と、関西館長(2020年4月〜2022年3月)のときしかいなくて本当にバタバタバタツとした怒涛のような日々だけが印象に残っています。最初の立ち上げの日々というのは組織として若い段階、その

から話しかけられることが多くて、「そうですね」と言ってニコニコしていましたけれど。

**佐藤** 建築を学んでいらっしやる学生さんとかからは「この机はどこが作ったものですか?」みたいなことを聞かれたりとか。「庭の木の名前はなんですか?」とか聞かれたりして、ちょっと答えられなかったんですけど、建物のことを聞かれることはそれなりにありました。

あと東京から見るとイケイケと感ずる時代があったと思います。電子図書館課をはじめとして「新しいことをやってやるぞ」という雰囲気を感じて、しかも東京本館だとさまざまな感じが中、比較的自由度が高い感じに動いているなというのを感じました。

で、関西館長として2年前に行ったら、良い言葉で言えば成熟したというのか、そこまでのパワーは無くなってきたか

な？ みたいな印象は受けて。職員  
の年齢層も高くなって、雰囲気  
が落ち着いたなと感  
じますね。

— 他の方はいかがですか？

**黒木** 関西館には3回赴任して  
います。2回目（2006年）は  
収集整理課（収集や整理を担  
当する部署）にいて、7〜8  
年いる中で、変わったなあ  
と思ったのは博士論文が紙  
で納付されていたものが電  
子に変わるといこと  
があったときに、社会全体が  
デジタルというものになるん  
だなあということとをすごく  
感じて。収集の仕方とか調  
整の仕方とかも変わって  
いくんだろなああと感じ  
ました。

## 電子図書館の構想について

— 電子図書館事業にお  
いては、関西館の担当範囲  
が大きいんですね。

**黒木** そうですね、ど  
つちかというところ  
電子情報部（東京本館に  
ある部署）から「こうい  
う風にやったら面白いん

— お客さんも変わって  
いますか？

**佐藤** お客さん、利用  
者の変化で言うと、最初  
の頃は本当にパソコンが  
バツッと並んでるところ  
でみなさん来てみたもの  
のどうすればいいのか戸  
惑われる方が多くて、唯  
一分かりやすいものとし  
て博士論文のカードボ  
ックスをなんとなく見て  
いらっしやる方がいら  
っしやあって、という感  
じだったんですけど、ど  
んどんみなさん慣れて  
いらっしやあって。世の中  
もそういう風に進んで  
いるんだなあという風  
に思っています。それ  
から、新しい書庫が  
できるときも、段々  
できていく書庫を  
見るのが楽しかった  
なあという気が  
します。

「じゃない？」という  
アイデアをもらいなが  
らやっていたので、  
基本的には一体化して  
やっていたのかなあ  
と思います。

**木藤** 2011年に電子  
情報部ができ

る前とできてからという  
のがまた違うんじゃない  
かと思うんですけど。電  
子情報部ができる前は、  
電子図書館課の所掌部  
分が大きくて、そのとき  
関西館で作ったシステ  
ムには、PORTA<sup>①</sup>とか、  
Dnavi<sup>②</sup>とかいろいろあ  
って、そういうのを試  
行で作ってそれを事業  
化していくみたいな流  
れが最初の頃であ  
って。で、WARP<sup>③</sup>とか  
後で始まった事業は世  
の中のデジタル化の流  
れに合わせてイケイケ  
みたいな感じのところ  
があって、そのうち  
に電子情報部が東京  
本館にできて、その  
東西の関係とかが  
微妙な感じになっ  
たんですけど、それ  
はギクシャクという  
より、関西館内でも  
各課の間つながり  
より、東京本館の  
カウンターパート  
のつながりの方が  
濃いとしばしば  
言われたりする  
ぐらいですね。

— 電子図書館事業の  
位置づけは、構  
想段階と比べて  
変わってきて  
いますか？

**木藤** 構想初期は  
電子図書館とい  
うものの輪郭が  
今とは違って  
いたのかも。遠  
隔サービスの一  
環として文献  
提供サービス  
でデジタル化  
して送るみた

いなことは織り込ま  
れていんですけど、  
大きな柱としては  
謳われていなかった。  
でも、たぶん2004  
年の「電子図書館  
中期計画」ができて  
からはむしろ電子  
図書館事業が関  
西館の大きな柱、  
という売り、とい  
う扱いになって  
きた。電子図書  
館事業は関西館  
の大きな柱では  
あるけれども時  
代によって微妙  
に位置づけが  
変わってきて  
いるなという  
風に思っ  
たなあ。この  
間までは、た  
ぶんデジタル  
化が一番目  
立っていたん  
だけ、今後は  
インターネット  
上で公開され  
る電子情報  
の有償での  
オンライン  
資料の収集  
はじめ、ポ  
ーンデジ  
タルをどう  
処理して  
いくかとい  
うところが  
電子図書  
館という  
中でも  
いろいろ  
変わ  
ってきて  
いるな  
あと。

— 変化がありますね。

**黒木** 私が2019年に  
電子図書館課  
に来たときは、安  
定路線の方に  
もう移るだ  
ろうという  
雰囲気はあ  
ったん  
ですよ。その  
後、補正  
予算でデ  
ジタル化  
が動く  
とか、本  
年5月  
から始  
まった  
個人  
向け送  
信サー  
ビスの  
ことを  
やる  
ぜつ  
て。い  
ったん  
安定に  
入るか  
と思っ  
たこ  
ろでも  
う1回  
ジャン  
プしよ  
うとい  
う

(1)各機関が公開しているデジタルアーカイブを横断検索できるサービス (2)国立国会図書館  
データベース・ナビゲーション・サービス (3)日本国内のウェブサイトを保存するサービス



木藤 淳子  
収集書誌部長（前・関西館長）

ことになったのかなという。電子図書館課って安定路線になるようでない、というのがイメージです。

——一口に電子図書館といってもいろいろな仕事がありますね。

**佐藤** 私は電子図書館課では著作権処理というのをやっています、当館で持っていないけど他の館にあって著者の没年が載ってそうな本とかを問い合わせたりしていたら、そこから「没年調査ソーン」というイベントを京都府立図書館の方々が始めてくださって。みんな没年を調べようというイベントが生まれたりしたのが印象深いなというのと、海外の方から「なんでこの資料はインターネット公開されていない

だ」みたいなお問い合わせが結構来て、海外からも注目されている事業なのだな、と思いました。

——関西館の準備段階では、どういう「電子図書館事業」を思い描いていましたか？

**木藤** 当時はそれこそ目録も、一部しかまだ外部に出していない時代で、総合目録事業が起動して、ようやく本格事業として動いているんだーみたいな時代だったんですね。そのときは書誌情報をはじめとする二次情報の扱いを

### 類縁機関との交流

ベースとしていました。

で、一次情報であるデジタルコンテンツの存在を扱おうとしたのがDnnaviで、それほど大きく盛り上がりがないで終わったというのは時期尚早だったというか、世の中に一次コンテンツがまだそんなになかったために、その有難味があまり伝わらなかったってことなのかなあって思います。この20年で、当館だけではなくいろんな形でもデジタル化とかネットワーク化が一挙に進んだんだなあということを改めて感じます。

——類縁機関との交流に、立地は関係ありますか？

**黒木** コロナ禍以降、ウェブ会議システムもあって、ここ2〜3年ですごくやりやすくなったのかなあという。ただ、やっぱり実際会ってみていろいろとおしゃべりしてみないと本音が言いにくいこともあったりするなあというところもあって、先日大阪まで出かけ

ていったこともありましたが。オンラインも対面も両輪でやっていけるようにしないとね、ということは今話しているところです。

——関西館にはアジア情報室がありますが、アジア情報関係機関とのつながりの維持については？

**佐藤** アジ研（アジア経済研究所）さんにはお世話になってます。他にも書誌作成勉強会というのを最初は関西の大学と一緒にやっていたんですけど、それを小耳に挟まれた北海道の方からうちもやりたいみたいなお声かけをしていただいて、つながりがあるよということを見せることでよりつながって行こうみたいな感じに思ったださる方もいるのかな。アジア情報関係に限らず、研修で結構いろんなところに行かせていただく機会が多くて、そういうときに国立国会図書館（NDL）を身近に感じてくださることがあるのかなという風には思っています。

## けいはんな学研都市の中で

— 関西館はけいはんな学研都市に位置していますが、そのつながりは？

**木藤** 私が関西館長をしていたのがコロナ期だったので、そういう交流がほとんど行えないという時期でした。関西館は立地の関係もあって来館者が伸びないという課題をずっと抱えていて、どうしてもその立地に縛られている問題があって、学研都市にある研究機関が利用者としての市場になるんじゃないかという思惑があった。学研都市は広大な敷地を持っていて、お隣と言っても遠いところにお隣があるので、知らなければわざわざ気軽に立ち寄ってくれるわけではないので、うちの図書館にこういうものやデータベースとかあるんですよということを知らうために、近隣の研究機関とか

## 立地との関係

— 図書館とのつながりは、立地との関係性はありますか？

に出かけて行って説明とかをしてユーザーを掘り起こしたりという活動をしていました。研究者同士はネットワークがあると思うんですけど、図書館だとなかなか普段からそこには入れない、その中でどうやって知ってもらうかというところが課題で、足で稼げないというのがあります。

— 双務的な関係というよりはどちらかというところから積極的にPRをしていくという関係ですか？

**木藤** そうですね。

**佐藤** その甲斐あって近隣の機関から自転車で関西館に来てますという声も聞きますね。

**木藤** 図書館協力事業にかかわらず、場所が関西館だからよかったというのは特にはないと思うんですけど、逆

に東京と離れていてもできるような仕事を関西でやっているって面が強いと思ってる。もちろん東京でもやろうと思えばできる仕事だと思うんですけども、やっぱりネットワークの軽さっていうのが前例とかにとられないで新しい部分を初めてやってみるといところはやりやすい雰囲気があるのかなあっていう風に感じますね。もともと図書館協力自体が隔々まで図書館サービス全般を届けたいというものなわけだから、関西館的な場所のところでも十分できるよというところに意味があるというか、だからこそ関西館に持って行ったのかなという気はします。で、なんだかんだ国会図書館は国内でも隔々まで知られてないっていうのが現実だと思うので、東京1か所だけじゃなくて、もうひとつ核ができたっていうのはいいかなと思います。

— 中核が複数あるということですね。

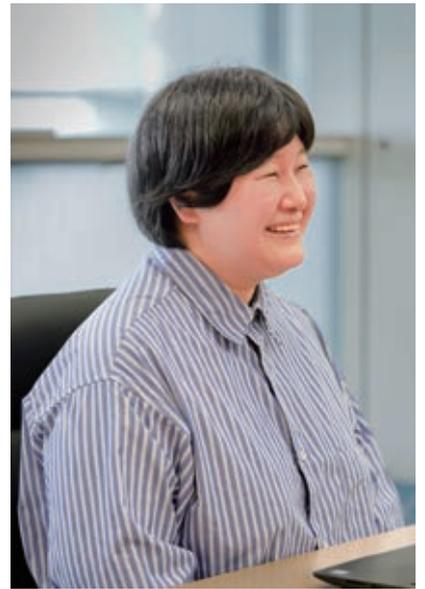
**佐藤** 私はレファレンス協同データベース（全国の図書館等と協同で構築している調べ物のための検索サービス）を担当していましたが、フットワークの軽さというところで好き勝手やらせてもらったなあ。Twitterも緩々な感じでやらせていただいたなあという風に思っています。

**黒木** 図書館向けイベントは直接は担当してませんが、「思いついたイベントとかをやりやすいサイズ感の組織なんだらうなあ」と、横目で見たり。

**木藤** 待っていても来てくれるというスタンスでいるんじゃないかって、自分か



黒木 大志郎  
関西館アジア情報課課長補佐



佐藤 久美子

関西館収集整理課整理係長

動いていた覚えがあります。

**佐藤** 震災に関係する情報をまとめてサイトに載せたりとか。

——最近は、コロナが少し落ち着いて、なにか変わったりしていますか？

**黒木** そうですね、アジア情報研修は今までウェブ会議でリモート開催に

していたんですけど、今年度「やっぱり集合でやりたいよね」という話になっています。コロナが落ち着いたら、もう少し対面を増やしたいなあと思って。対面とリモートと、カードを2枚

に増やした状態で研修とかができるようになったという。ちょっと強くなれるのかなあと思っています。

**佐藤** コロナが原因で資料が到着しなかったりということは、若干減ってきたのかなあと思います。

い。しかも白っぽい建物だから、もっと汚れているのかなあと思ったんですけど、美しさを保ったままでいるところがよくて、多少不便なところはあっても閲覧室の鋸屋根から光が入ってくる感じとか、雑木林の中庭が見えるところとかは、素敵な場所だな、もっと取り上げてもらいたいなって思いますね。

**黒木** お洒落な建物という扱いなのかなあ。ただ、外から見てみなさん「お洒落」って終わらせている方も多いので、そのままちゃんと中に入ってきて！中はもっとお洒落だよ！と。

**木藤** ちょうど関西館ができたときは景気とかの関係もあって、まだ学研都市には空き地がいくつか残っていました。が、いまは地区を拡大しようという話もあるくらいなので、そういう意味で学研都市全体が成長しているという感じですね。

## 災禍のなかで

ら出かけて行かなきゃ届かないということで、新しいこと、アイデアを思いつきやすい場所なのかもしれませんよね、関西館は。

**黒木** そうですね、打って出ないと誰

——東日本大震災が起きたときに、東京本館で一部資料が使えない状態があったんですけど、そのときの関西館の様子の記憶はありますか？

**黒木** 私は収集担当で、ものが届く届かないの方でワタワタしていたのと、東京の機能を補完するという話が結構

にも気づいてもらえないことの方が大きいので、ひきこもってはいられないというのがあるのかなあと。

——耳が痛いような、でも、いいことを聞いたような気がします。

大きく出てきたときで、そのための資料集めをどうするの？みたいな話で

## 門をくぐってほら

**木藤** 全然話は違って、最初の方で建物の話が出てきたんですけど、美しい

と思いますよね、閲覧室も。築20年くらい経ってもあんまり変わっていない



地図で見る

けいはんな学研都市のいまむかし

# 関西館

林はやし 瞬しゅんすけ 介けい

国立国会図書館関西館は、関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）の精華・西木津地区（京都市相楽郡精華町）にあります。学研都市の玄関口である祝園駅ほうそのえきからバスに乗り、関西館に向かいながらその街並みを眺めてみましょう。

出発地点の祝園は古代から存在している地名で、木津川が流れる標高30メートルほどの低地に位置しています。駅を出発したバスは府道22号山手幹線を南に進み、坂を上ると標高50メートルほどの丘の上に精華・西木津地区の街並みが見れます。

山手幹線は畑はたのまえノ前公園の前で行き止まりとなり、バスは右折して、メ

タセコイアの並木が連なる精華大通りに入ります。約2キロメートルにわたって上り坂が続ぎ、左右には病院や商業施設、けいはんなオープンイノベーションセンター（旧「私のしごと館」）などが並んでいます。

けいはんな記念公園を通り過ぎると標高90メートルほどで平坦になります。東西を貫く精華大通りに沿って、左右に関西館、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）、けいはんなプラザなど、学研都市の中心施設が立ち並んでいる光景が見えます。

学研都市の街並みは、なだらかな丘陵の上に広がっています。ですが、開発が始まる以前は、現在とまったく異なる様相を見せていました。

けいはんな学研都市のドローン画像（平成28年度撮影）  
画像提供：公益財団法人 関西文化学術研究都市推進機構

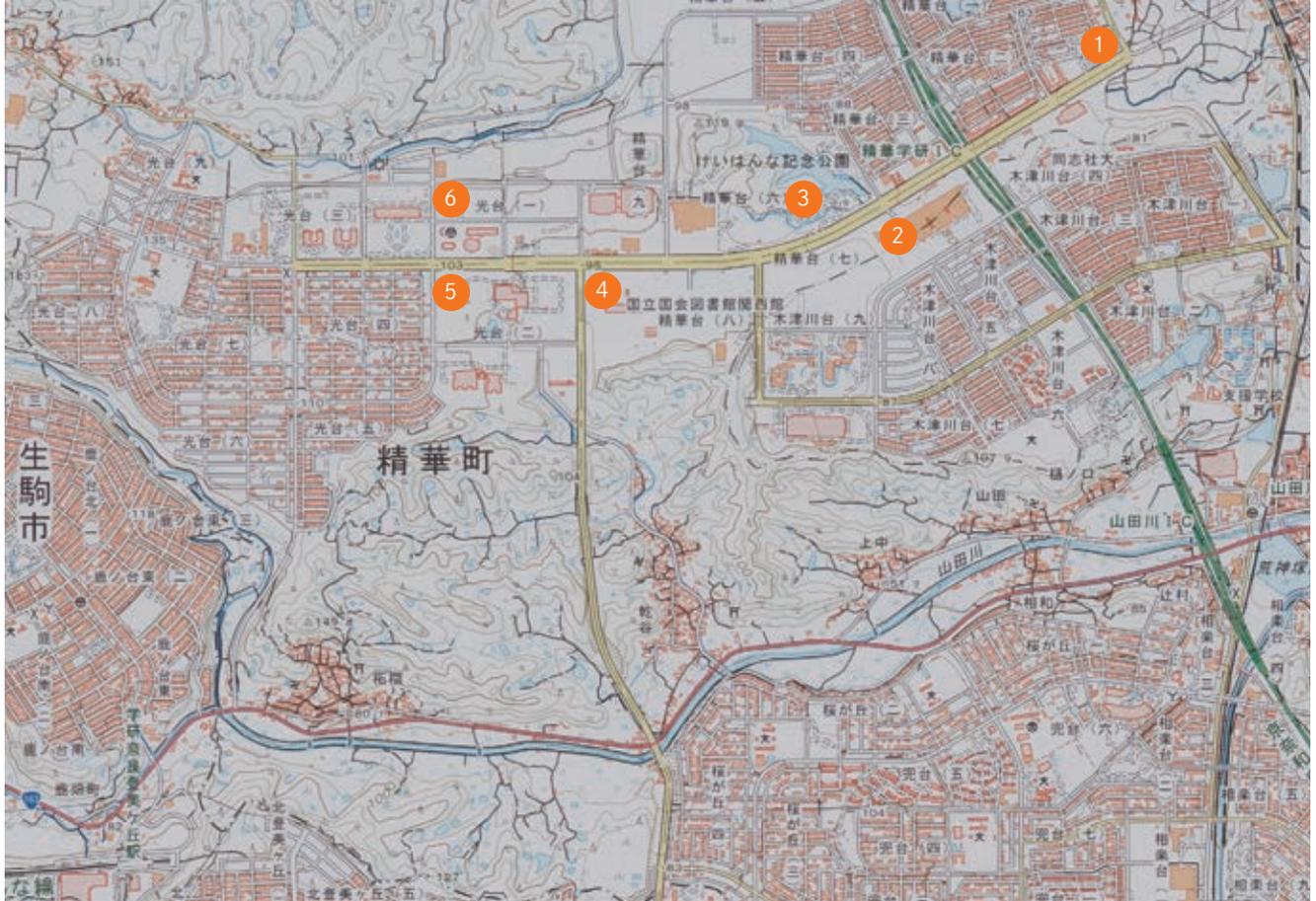


図1 現在の精華・西木津地区 (2015年) 『奈良 (2万5千分1地形図)』国土地理院 2015 <請求記号 YG1-Z-2.5-74-4-d >

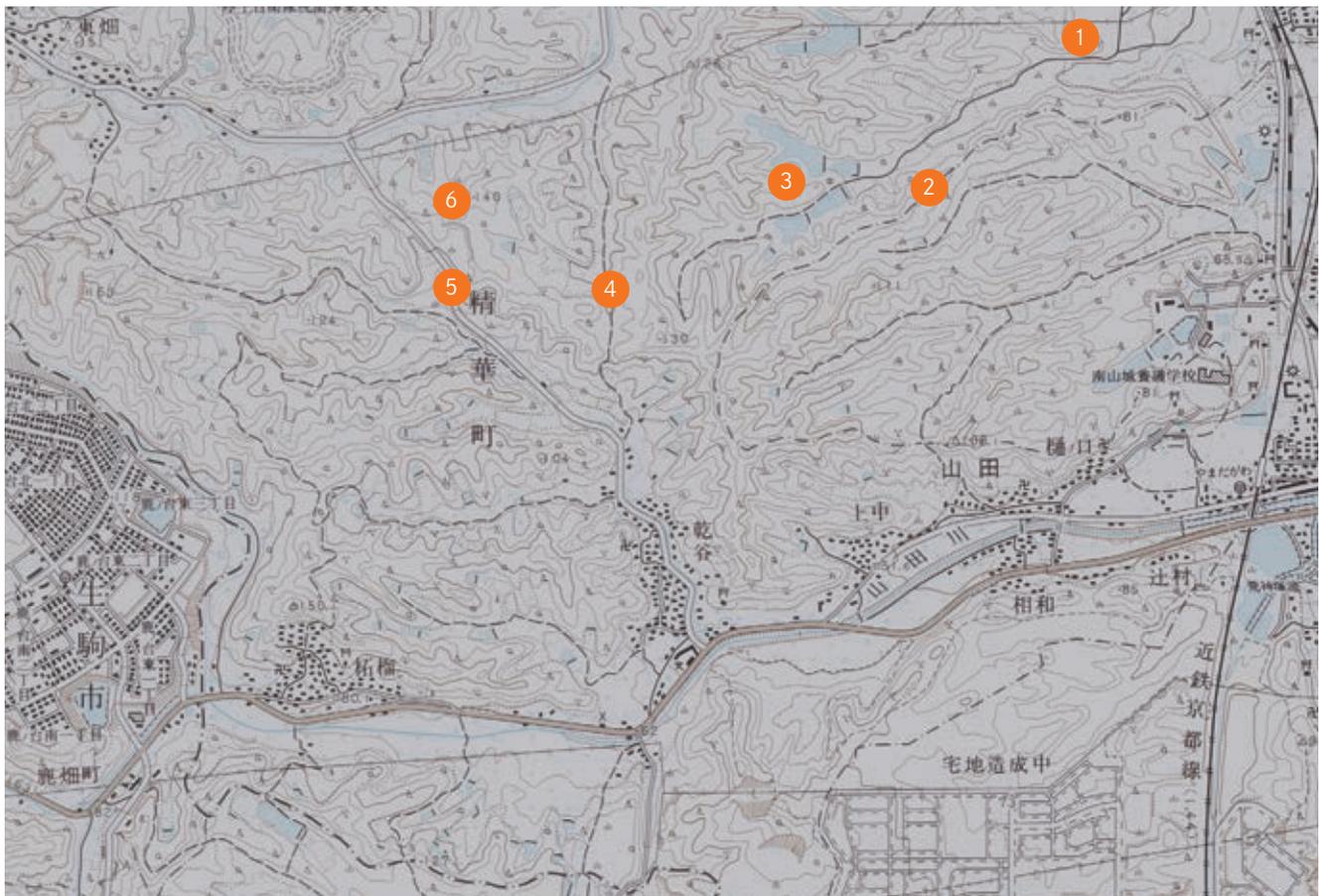


図2 開発前の精華町周辺 (1983年) 『1:25000 奈良』国土地理院 1984 <請求記号 YG1-Z-2.5-74-4-d >

※図1・2は2万5千分の1原寸を約96%に縮小しています。

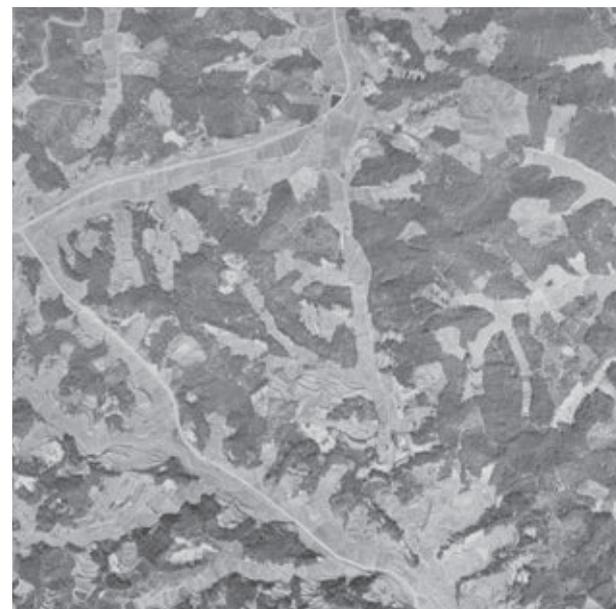
- ①畑ノ前公園 ②けいはんなオープンインベーションセンター ③けいはんな記念公園
- ④国立国会図書館関西館 ⑤ATR ⑥けいはんなプラザ



図3 江戸時代の相楽郡  
増補京都叢書刊行会 編『京都叢書 第8』増補京都叢書刊行会  
1934 <請求記号 291.62-Ky9958-K(h) >



図4 段々に開かれた田畑 (1948年撮影)  
国土地理院空中写真 <https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=31456>



### 開発前の京阪奈丘陵

三重県の伊賀地方から水を集めて西へと流れる木津川は、精華・西木津地区の目前で丘陵に行く手を阻まれるように北に針路を変えます。この丘陵は、大阪平野と奈良盆地の間にそびえる生駒山地の北端を取り巻くように京都府・大阪府・奈良県の県境一体に広がっていることから、「京阪奈丘陵」と呼ばれています。

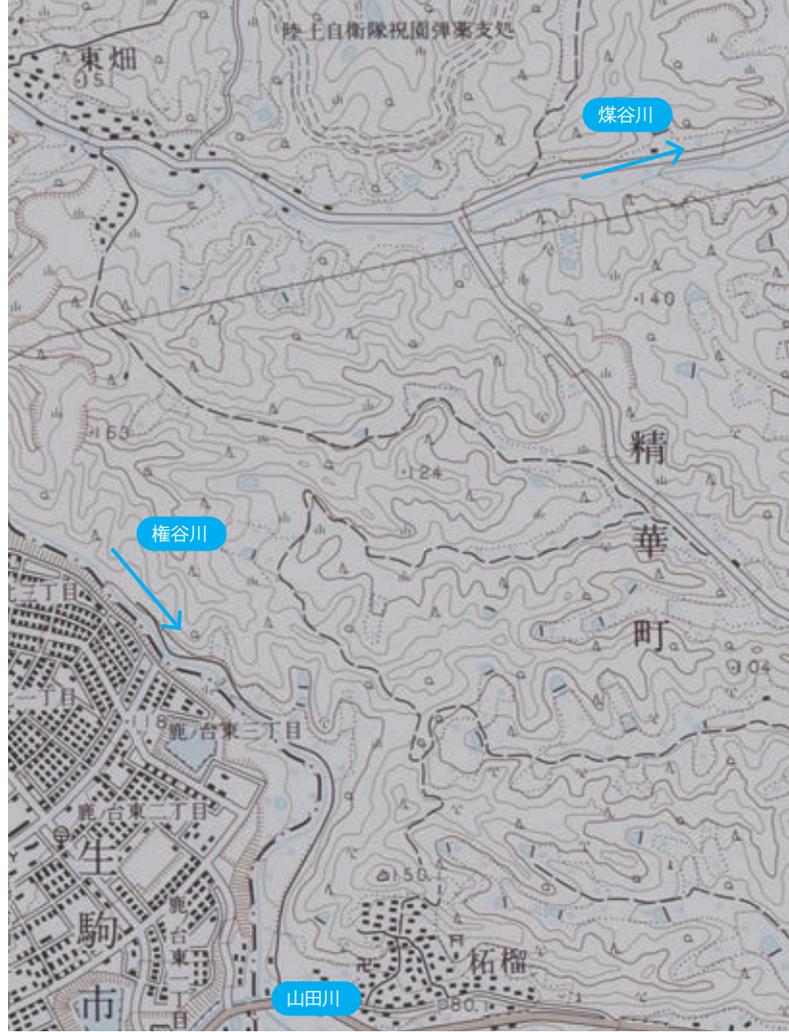
京阪奈丘陵は、鮮新世の末期から更新世の中頃(約300万年前から約30万年前まで)に堆積した「大阪

層群」と呼ばれる地層群から成り立っています。大阪層群は大阪平野や奈良盆地では沈降して地中深くに伏在していますが、京阪奈丘陵では標高200メートル近くまで隆起しました。

丘陵は長い年月の間に雨水による浸食を受け、多くの小河川を生み出しました。正徳元(1711)年に出版された地誌『山城名勝志』(大島武好撰)の附図には、東畑村から北東に流れる煤谷川と、栢榴村から東に流れる山田川が描かれています。山田川は乾谷村周辺の丘陵地帯でさ

図5 造成中の精華・西木津地区（1994年撮影）

国土地理院空中写真 <https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=775676>



1983年地形図（図2）の部分拡大

らに多くの支流に枝分かれしてしました（図3）。

開発前の地形図（図2）にびっしりと書き込まれた等高線は、これらの川が流れる谷を表したものです。谷の頂点にはため池が設けられ、等高線に並行して段々に田畑が広がっていました（図4）。

### 学研都市の誕生

京阪奈丘陵は長く住宅開発の手が入らず、里山と農地が残されていました。

昭和53（1978）年、京都大学元総長の奥田東氏<sup>あきま</sup>ら関西地方の学識者と財界人が集まり、「関西研究学園」を建設する都市構想を発表しました。この構想に国や地元自治体が賛同したことで京阪奈丘陵に関西文化学術研究都市を建設することが決まり、精華町と木津町（現在の木津川市）にはその中核となる精華・西木津地区が開かれることになりました。

昭和60（1985）年に住宅・都市整備公団（現在のUR都市機構）による祝園特定土地地区画整理事業（現在の光台<sup>ひかりだい</sup>）、平成5（1993）年に民

間事業者3社による精華台土地地区画整理事業が起工し、平成6（1994）年、学研都市びらきが行われました。

### 関西館の立地と景観

学研都市の建設に当たって、その中核施設として第二の国立国会図書館の建設を求める要望が地元官民各団体から寄せられました。これを受けて国立国会図書館は昭和56（1981）年度から関西プロジェクトの調査に着手し、平成6（1994）年に関西館建設の事業化が決まりました。



関西館建設予定地



2015年の関西館周辺 (図1の部分拡大)



1983年の関西館周辺 (図2の部分拡大)



○参考文献 (<>内は当館請求記号)

精華町史編さん委員会 編『精華町史 史料篇2』精華町  
1992 <GC158-E42 >

市原実 編著『大阪層群』創元社 1993 <ME617-E13 >

杉野園明 編『関西学研都市の研究』有斐閣 1993  
<DD83-E286 >

精華町史編纂委員会 編『精華町史 本文篇』精華町  
1996 <GC158-E42 >

中川要之助 「けいはんな学研都市の地質と地盤—精華・西  
木津地区の地盤とその問題点」『同志社大学理工学研究報  
告』47巻3号 2006.10 pp.169-184 <Z14-22 >

国立国会図書館七十年記念館史編さん委員会 編『デジ  
タル時代の国立国会図書館 1998-2018 国立国会図書  
館七十年記念館史』国立国会図書館 2021

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11645818>

時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」  
<https://ktgis.net/kjmapw/>

※ URL の最終アクセス日: 2022年7月13日

平成7(1995)年度予算から用  
地取得が始まった関西館の立地は、  
精華・西木津地区を東西に貫く精華  
大通りと、同地区と奈良市とを南北  
につなぐ京都府道52号奈良精華線の  
交点に当たります。この場所を開発  
前後の地図を比較しながら確認して  
みましょう。

みましよう。

現在の光台は、煤谷川と乾谷川の  
支流が入り組んでいくつもの谷に分  
かれており、永谷池の西側には北側  
から煤谷川の支流が入り込んでいま  
した。関西館の場所は、「車谷」と呼  
ばれていたこの谷の頂部に当たるよ  
うです。

関西館の北東にあるけいはんな記  
念公園には、開発前からある永谷池  
が残されています。この池は、木津  
川の支流である堀池川の上流に築造  
されたため池で、煤谷川から地下ト  
ンネルで引いた農業用水を貯留して  
いました。現在の精華台はかつての  
堀池川の流域を覆うように造成され

関西館の敷地は、現在もかつての  
谷底に相当する標高95メートルの精  
華大通りから、開発区域外の標高  
130メートルの尾根に向かって南  
に高くなっています。関西館の外観  
はこの地形を生かし、屋上緑化によ  
りかつての里山の風景を再現してい  
るのです。

「表紙は雑誌の顔」というフレーズを聞いたことはあるでしょうか。本誌『国立国会図書館月報』（以下、月報）にもそれは当てはまります。

月報の表紙は、原則、国立国会図書館の所蔵資料の中から選んでいます。ホームページやツイートのから辿る方にとつても、この表紙を見て読まれるかどうかが決まることもあるわけで、大事な広告塔です。

月報の表紙画像は、国立国会図書館デジタルコレクションがなかった頃は「貴重書画像データベース」から探すことが多く、ほとんどが古典籍資料でした。また、A4横書きの時代（2008年4月号〜2017年4月号）は、表紙に使用できる形が決まっていたため、一部の画像が切れてしまったことも。そういう意味では、現在の判型は自由度が高いのですが、それでも毎号、苦悩の連続です。

表紙を選ぶ際に気を付けているのは、①パッと見た瞬間の印象②季節感③記事内容との連動、といったところでしょうか。③の条件まで満たせるとベストですが、なかなか難しいため実際には①

と②のみ満たしていることが多いです。

また、なるべく多くの画家を紹介したいので、毎月さまざまな画家の絵を探すようにしています。ただ、コントラストがはっきりしている版画などはとても使いやすい、中には1年に1回くらいの頻度で登場してしまう画家も（ご興味がある方は、ぜひ過去の月報の表紙や記事「表紙画家セレクション」をチェックしてみてください）。

さて、いざ表紙に選んだ画像を編集ソフト上ではめ込んでみると、予想と違った印象になることがあります。デジタルコレクションの黒と表紙の白の背景色の違いのせいでしょうか。ほかに、思ったより地味がっかりしたり、逆に図書館の広報誌としては艶やかになりすぎてしまったり……。試行錯誤しながら数点の表紙を作って、並べて、見比べて。今号もようやく完成です。

最後にもう一つ。裏表紙は基本、本誌に掲載した画像の中から選んで載せています。お時間がありましたら、どの記事のどこから選んだか、ぜひ探してみてください。

（総務課編集係 秋の七草）

表紙は雑誌の顔です



# 国立国会図書館で働いています

Season2

no.10

Final

デジタルシフトが、ほかの図書館も参加していただけるような形で面白いものになるといいのかな



関西館電子図書館課課長補佐として、どんなお仕事を担当されていますか。

資料のデジタル化を行い、成果物を国立国会図書館デジタルコレクション（以下、デジタルコレクション）に格納し、絶版等により入手困難な資料は図書館送信<sup>①</sup>や個人送信<sup>②</sup>で提供し、著作権が切れたもの等はインターネット公開で提供、という一連の業務を担当しています。課長補佐としては他部局との調整が一番大きなことですかね。

現在、国立国会図書館（以下、NDL）では大規模なデジタル化を進めています。そこにも関係したお仕事を？

令和3年にNDLにデジタル化実施本部ができて特別態勢でやっていて、その中に電子図書館課も入ってまして、館が一体となって今やっている感じです。

今の課に異動と同時にコロナ禍が。

ちょうどコロナ禍で図書館送信を実施している図書館が休んでいるからどうしよう、ということが問題になり、個人送信の議論が文化庁の審議会や関係者との協議会<sup>③</sup>で始まりまし

た。その議論の過程を傍聴させてもらい、デジタル化された資料が個人に送信されるようになると、個人の研究活動や各図書館の運営はどうなっていくんだろうなっていうのを考えて2年間経った感じですかね。個人送信が始まると各個人が見られる資料がドカッと増えるわけで、例えば個人送信が始まったら各図書館の仕事がなくなるんじゃないかというような声も知り合いの図書館員から聞くようになりました。

具体的にはどんな？

ある図書館に呼ばれて話をする機会があって、個人送信が始まって多くの資料が直接利用者に届く時代になると、図書館に来る人ってどうなるんだろうなって。



国立国会図書館デジタルコレクショントップページ

## 岡本 常将 関西館 電子図書館課課長補佐

平成14（2002）年10月 関西館 資料部 文献提供課 閲覧係（平成15年4月から参考係）  
平成17（2005）年4月 関西館 事業部 電子図書館課 資料電子化係  
平成20（2008）年4月 調査及び立法考査局 国土交通課  
平成21（2009）年5月 総務部 大規模デジタル化実施本部  
平成22（2010）年7月 関西館 電子図書館課 著作権処理係長（平成19年の組織改編による。平成25年4月から研究企画係）  
平成26（2014）年4月 関西館 文献提供課 参考係（平成26年7月～平成31年3月 参考係長）  
令和2（2020）年4月 関西館 電子図書館課課長補佐

※令和4年5月20日インタビュー実施

なるほど。

NDLが個人送信始めるらしいよ、までは各図書館の人は情報として知っているのだけど、じゃあどんな資料がどんな基準で選択され送信されていった、それが自分たちの資料とどれくらい重なるのかとか、そこまではやっぱりわからないんだと思うんですね。そこをより一層丁寧に説明していかないと、という気がしています。

コロナが落ち着いてきて、各図書館の仕事の仕方も変わっていく中で、何がNDLはできるかな。デジタルコレクションというサイト、そこで提供しているコンテンツやサービスは皆さんの何の役に立つだろうか、というのをコロナ以降は特に考えますね。

◆ ◆ ◆  
入館後、しばらくして最初に電子図書館課に異動されましたが、そこでは何を？

資料電子化係で明治期・大正期刊行図書デジタル化と著作権処理を担当していました。作業は外部に委託して、その管理が主な業務です

かね。それで納品されたものを、当時は「近代デジタルライブラリー」と呼んでいたシステムで公開していました。

現在のデジタル化との違いは？

当時はシステム的にも制度的にもデジタル化した資料はインターネット公開をするか、しないかの二択しかなくて。できるだけ多くのものをデジタル化して、インターネット公開していくような流れだったように思います。その後、著作権法が改正されて、著作権が切れない資料でも入手困難なものであれば、図書館などに送信が可能になり、つい最近では個人への送信も始まりました。デジタル化の手法は大きくは変わっていないように思いますが、著作権法の改正などにより、提供方法の選択肢が増えましたね。

◆ ◆ ◆  
この後、調査及び立法考査局国土交通課へ移動されました。ご担当は？

運輸分野を担当していました。鉄道、飛行機などの乗り物関係ですね。最初はいろいろな資料を読んで、そもそもどんな論点があるのかとか、周り

を見ながら勉強する感じでした。

印象深かったことは？

国土交通課は1年しかいなかったんですけど、まちづくりのテーマが面白いなって思いました。出張の機会をもらって北陸三県を回って記事を書いたんですけど、私の出身は金沢で、自分の育った街は富山や福井と違ってなんで市電やLRTが通らないんだらうって疑問をずっと持っていたので。また、これから人口が減っていく中でまちづくりのありかたってどうなるんだらうって、そういうことを考えさせられました。

◆ ◆ ◆  
国土交通課に異動されてちょうど1年後に、再びデジタル化の担当に。全館挙げての一大事業ですね。

各部署から人が異動して、実施本部署の事務局が立ち上がった感じでした。これまでにない規模のデジタル化事業だったのですべてが一から、という感じでしたね。

◆ ◆ ◆  
デジタル化の経験を買われて、ということだったんでしょうか。そうですね、デジタル化と著作権処理

理の二つを経験した人間がたまたま東京本館にいた、ということからでしょうか。NDLはそれまでマイクロフィルムからのデジタル化しかしてこなかったもので、この時から初めて原資料からやろうと。じゃあどういう風にやるのかっていう仕様書を作ることから始めなきゃいけなかったのがけっこう大変でした。

◆ ◆ ◆  
この後、外部でデジタル化のお話をするようになったとか。

大規模デジタル化実施本部に来てからは外部へのプレゼンテーションの機会がものすごく増えて。各図書館主催の研修会やイベントでお話しする機会をいただくことが多くなり、海外の日本研究者向けの学会でも発



東京本館ともオンラインで打合せを行います。

(1) 図書館向けデジタル化資料送信サービス。国立国会図書館のデジタル化資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を全国の公共図書館、大学図書館等（NDLの承認を受けた図書館に限る。）の館内で利用できるサービス。(2) 個人向けデジタル化資料送信サービス。(3) 国立国会図書館による入手困難資料の個人送信に関する関係者協議会 (4) 明治以降に刊行された和図書のデジタル化資料の提供データベース。平成28（2016）年5月31日にデジタルコレクションに統合。



関西館事務用入口近くの吹き抜けにて。

表させてもらいました。NDLが大規模にデジタル化を行ったことで、図書館員の皆さんが何を考えているのか、本音で話し合ったりできるいい機会だったなあと思います。

その後デジタル化の遠隔研修も担当されていますね。

それより前は資料デジタル化研修という名前で、NDLに来てもらう研修をずっとしてきて。それだと年1回だから動画を作りましょうという感じでしたね。

ただデジタル化の研修って、NDLは大規模に予算を組んでデジタル化をやっているわけじゃないですか。各図書館はそんなじゃなくて、デジタル化はしたいんだけどスキャナを1台買うのも難しかったりする。そ

のニーズとNDLが経験から提供できることのギャップをどうしようかなってところですね。

そうですね。予算、規模が全然違うから、そのできてる中で、というのが。皆さんのニーズとNDLが提供できることのギャップがある一方でやっぱり情報共有の場って大事で。NDLのやり方を一方的に伝えるのではなくて、どちらかという前に立たずに、「デジタル化とかデジタルアーカイブについてもいろいろなやり方があるよね」という、喋りあう場を作りたいなど。

電子図書館部門以外では、文献提供課参考係を長く担当されてますね。

参考係の後半5〜6年でやったのは、関西館をより身近に知ってもらう取組と、その一環としての総合閲覧室のリニューアルですかね。

具体的に言うって？

関西館で新たに購入した資料はできるだけ開架にして、来館した人に面白がってもらえる閲覧室にしよ、ということを始めました。例え

ば、総合閲覧室の雑誌コーナーには500種類くらいの雑誌があるんですけど、それらの大半を変えるなど全面リニューアルをしました。

全面リニューアル！

当時の上司の後押しもあって、「けいはんな学研都市」のまちづくりのいちプレイヤーとして関西館の利活用促進をしていきましたよってことで。ほかにも書庫行きだった展覧会の図録を開架ですらつと並べたりとか。地域の人のとつての一つの居場所としての関西館を生み出すためにいろいろやったなという感じはします。関西館の周辺の大きな企業は全部ほぼ訪問しましたね。

部署は変わっても、外部に足を運ぶというのは変わらなかったんですね。企業以外にもどこか訪問されたんですか？

京都府や奈良県内の大学や公共図書館司書の方や、もっと身近だと高校の学校司書の方ともコミュニケーションをとって、訪問したり来てもらったりしてガイダンスや意見交換などをさせてもらいました。そのう

ち関西館が変なことやっているとはいよってというのが広まって（笑）、遠方からいくつかの公共図書館の方が関西館を見に来てくれました。ローカルなライブラリーとしての一面がある関西館でやったこと、実践したことを各種の研修などでアウトプットとして各図書館に返していく、ということが大事なのかなと思っています。

◆ ◆ ◆

大学で専攻されていたのは？  
デンマーク語で北欧の歴史。北欧が図書館の先進国だからとか、そんなことは全然知らなくて、児童文学と歴史が面白いかなって。

NDLに入館前は塾で講師をされていたとか。

地元の多くの子どもが通ってくる補習塾で、そこが一つの居場所になっている子もいました。サードプレイスとか言うんですかね。図書館という場所も、ある人にとってはそんな居心地のいい場所になったらいいかなっていう思いはあった感じですね。でもそれに気付いたのも、NDLに

入って4〜5年くらい経ってから。

ではNDLを目指されたのは？

大学を卒業する前後くらいから独学で司法試験を目指していました。何か自分の名前で地方に帰ってもできる仕事がいいなど。法律って語学と一緒に、何かを伝えたり解決したりする道具だと思いい、それをしっかりと使いこなして何かできないかなと思っ

て、ずっと法律の勉強をしてきたんですね。でもずっと落ち続けている、3回落ちたら諦めようかなって。じゃあ落ちたら何するってところで、3回目の受験時はいくつかの公務員試験を受けました。とりあえず入館したのは、合格して一番最初に10月に来ないかという電話をしてくれたのがNDLだったから(笑)

ちなみに今は遠くから通勤されているとか。  
滋賀の北部、彦根に住んでいるんですけど。通勤は車で片道100キロで、2時間ぐらいかかります。

2時間！ 運転お疲れ様です。毎日大変じゃないですか？

車の運転は好きですね。毎日通勤で200キロ走って、休みの利用も含めると年間6万キロ走っています。気分転換の方法も運転することでしょうか。彦根を選んだのは実家に比較的近いことと、城下町の雰囲気の色濃く残っていること。

お城が好きなんですか？

実家の金沢も城下町で、金沢には天守がないんですよ。それに違和感はないんですけど、天守がある街ということが羨ましい気持ちがある内にあっただんでしょね。

それもお縁ですね。ご縁と言えば保護した猫を飼っていらっしやるとか。

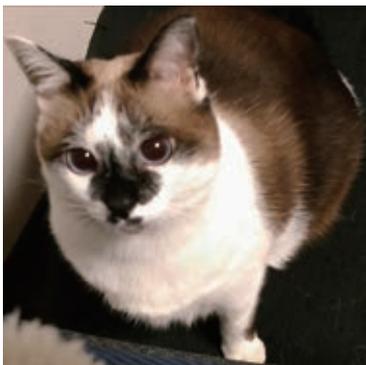
6年ほど前、参考係にいた時に猫が関西館の敷地内に迷い込んできて。たまたま土曜日で出勤者も少なく、いろいろ考えて、まあ縁だろうと思っ

◆ ◆ ◆  
今後NDLはどうあるべきと思います

すか。

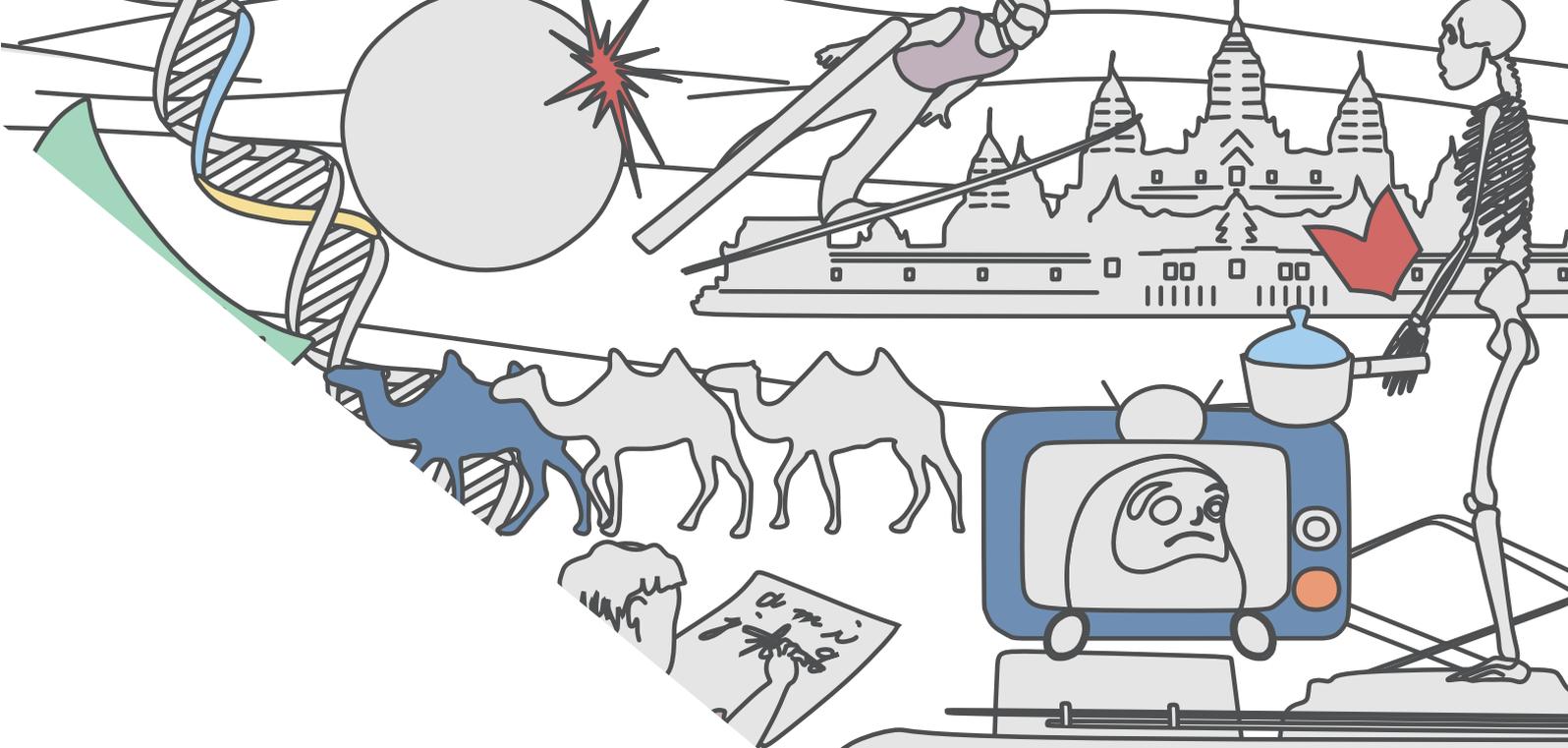
デジタル化の担当をしているので、NDLが掲げているデジタルシフトを進める一助になりたいなと思っています。そのデジタルシフトがNDLだけじゃなくて、大学図書館や公共図書館も一緒に参加していただけるような形で面白いものになるといいのかなと。デジタルになると図書館という枠じゃなくて、美術館や文書館とか、そういう類縁施設ともしっかりコミュニケーションをとってやっていく。もちろん、すでにジャンプサーチでやっていますけど、それが普通のような時代になると面白いかなと思いますね。

あと、塾が居場所になっているって



子どもがいるのと同じく、NDLでなくとも皆さんの近くの図書館が自分にとっての居場所になっているという人が増えたらいいと思います。

(上)彦根城。(右下)彦根城下は和菓子屋が多いです。写真は2/22(猫の日)に作られる生菓子。(左下) 保護した猫の森八 (メスです)。



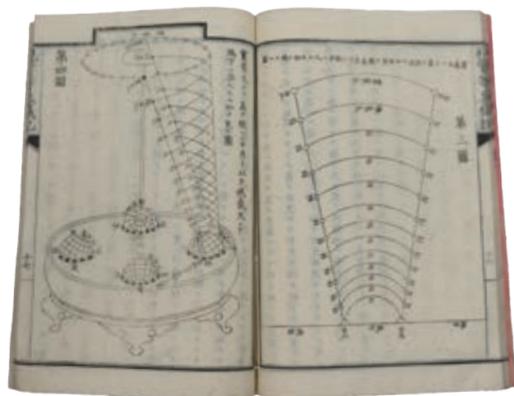
国立国会図書館関西館開館 20 周年記念  
第 30 回関西館資料展示

# 巨大書庫には 何がある？

— 関西館資料展示を振り返る —



# 関西館のとおっておき、大集合！



1

関西館は、20年前の2002年10月に開館しました。また、2009年から定期開催を始めた関西館の資料展示は今回で30回を数えます。

二つの節目を迎えるにあたり、これまでの資料展示で出展した約2,500点から、見どころとされた資料やアジア言語資料、博士論文などの特色ある資料を中心に選抜した約180点を展示します。

また、関連展示として、1995-1996年に実施された関西館建築設計競技の応募作品493点の中から、最優秀作品・優秀作品の一部を展示します。



2

2022

9/22 木 ▶ 10/18 火

9:30 ~ 18:00 ※日曜・祝日を除く

国立国会図書館関西館 閲覧室(地下1階)

関連展示：大会議室(地下1階)

入場無料

※18歳未満の方は所定の手続きの上でご覧いただけます。



『体操図 文部省正定』  
師範学校【編】 浜田県  
【明治・】【特53-833】

公式HP

[https://www.ndl.go.jp/jp/event/exhibitions/kansai\\_202209.html](https://www.ndl.go.jp/jp/event/exhibitions/kansai_202209.html)



3

1 『視実等象儀記 一名・天地共和儀記 初篇』 佐田介石 著 藤田古梅 1877 【244-379】

2 『売茶翁茶器図』 木村孔陽【編】 泉谷末三郎 1924 【15-415】

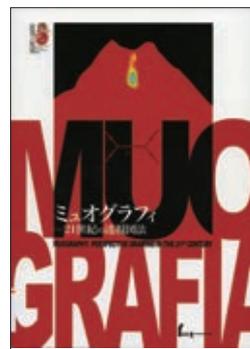
3 『自動車発明史 (販売員新常識講座)』 日本ゼネラル・モーターズ株式会社販売店経営課【編】 日本ゼネラル・モーターズ 1939 【特233-746】

【 】内は当館請求記号

○問合せ先  
0774-98-1341 (関西館資料案内 9:30 ~ 17:00)

# 本屋に

# ない本



## ミュオグラフィ Muography

21世紀の透視図法 特別展示  
宮本英昭・田中宏幸・新原隆史 編  
東京大学総合研究博物館 2015.12  
119p；26cm  
<請求記号 MC271-L12 >

19世紀、X線の発見により透視技術が初めて実現した。X線によるレントゲン撮影の技術は、それまで解剖でしか知り得なかつた人間の身体構造の透視を可能にし、今や工業製品の検査に利用されるなど汎用的な科学技術として普及している。

しかし、レントゲン撮影の対象はあくまでX線が透過できる大きさ・密度のものに限定され、例えば火山やビルなどの巨大物体は透視できない。巨大物体を透視するにはX線よりも透過力が高い粒子——空から降り注ぎ、地下にまで届くような——が必要であり、それを駆使した最新の透視技術を「ミュオグラフィ」という。ミュオグラフィでは、レントゲン撮影と同じ

原理で、X線の代わりに宇宙線由来の素粒子・ミュオンを用いて対象を透視する。巨大物体の内部を非破壊的に観察できる点で革新的なこの技術は、2007年に日本で初めて実用化され、今日では火山学や考古学、原発廃炉に至る諸分野で応用されている。

ミュオグラフィの原理とその適用例について概説した一冊が『ミュオグラフィ Muography 21世紀の透視図法 特別展示』である。東京大学総合研究博物館と東京大学地震研究所による展覧会（2015年開催）の図録として刊行された同書は、ミュオグラフィに関する数少ないフルカラーの参考書ともいえる。

表紙の赤いシルエットは薩摩硫黄島

のマグマ位置を可視化した、実際のミュオグラフィ画像である。この図からは、レントゲンというよりもサーモ

グラフィのような印象を受けるかもしれないが、ここでの色の分布は温度ではなく密度を表す（暖色は高密度、寒色は低密度）。レントゲン撮影は、X線が骨などの密度の高い部分で吸収されることで身体内部の構造を浮き彫りにするが、ミュオグラフィも、素粒子・ミュオンが密度の高い岩盤などでは透過しにくくなることを利用して、透過率の違いに密度分布を基に内部構造を画像として再現する。

本書では実際の適用例として、ピラミッド研究の歴史的背景にも紙幅を割いている。ミュオグラフィの端緒がピ

ラミッドでの隠された部屋の探査にあることは特筆に値するだろう。目下は、ミュオグラフィを用いてピラミッドの石材の積み方、使用石材の比率の調査を行うことで、数千年にわたり原型を保ち続けるピラミッドの耐震構造について研究が進められるという。従来、通行可能な通路・部屋での調査を中心としていたピラミッド研究に、ミュオグラフィは透視という新たな視座をもたらした。こうした普遍的要請に応えるミュオグラフィの技術は、今後あらゆる研究の発展に大きな役割を果たしていくことだろう。本書からは、ミュオグラフィの広範な応用可能性が眺望できる。

（田中耀子）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

# NDL Topics

## 国際子ども図書館展示会

### 「スペイン語でつながる子どもの本—スペインと中南米から」

国際子ども図書館では、令和4年10月4日（火）から12月25日（日）まで、展示会「スペイン語でつながる子どもの本—スペインと中南米から」を開催します。

この展示会では、スペインや中南米出身の作家・画家約40名による子どもの本を紹介いたします。スペイン語で書かれた子ども本の多彩で豊かな表現をお楽しみください。

皆様のご来場をお待ちしております。

○開催期間 10月4日（火）～12月25日（日）

※月曜日、国民の祝日・休日、毎月第3水曜日（資料整理休館日）は休館

○開催時間 9時30分～17時

○会場 国際子ども図書館レンガ棟3階本のミュージアム

### 関連イベントのご案内

### 講演動画配信「スペインと中南米の子どもの本—この100年の変遷と今—」

スペイン語翻訳家である宇野和美氏を講師にお迎えし、ご講演いただきます。スペイン語圏の子どもの本の、この100年の状況や、現在の出版事情、日本での翻訳や作品紹介の実情などについてお話いただいた動画を、YouTubeの国立国会図書館公式チャンネルで公開します。



展示会「スペイン語でつながる子どもの本—スペインと中南米から」ちらし

○期間 9月30日（金）～12月25日（日）

○対象 中学生以上を対象としますが、期間中はごなだでもご覧いただけます。

○申込み 事前申込みは不要

○問合せ先 国際子ども図書館資料情報課 展示係  
電話 03（3827）2053（代表）

※開催予定が変更になる場合があります。最新情報については、国際子ども図書館ホームページなどでご確認ください。

<https://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/tenji2022-03.html>

## 第24回図書館総合展2022 ONLINE plusに参加します

11月1日（火）から11月30日（水）まで開催される「第24回図書館総合展2022 ONLINE plus」に、国立国会図書館もオンライン形式で参加します。

図書館総合展のウェブサイト上で、国立国会図書館の様々なサービスをご紹介します。また、期間中に次のフォーラム（オンラインイベント形式）を開催します。

### フォーラム「#NDL全文使ってみた ～次世代デジタルライブラリー」と「NDL Ngram Viewer」

○日時 11月1日（火）15時～17時10分

○講師 橋本雄太国立歴史民俗博物館准教授

永崎研宣人文情報学研究所主席研究員 ほか

○お申込みは9月下旬から国立国会図書館ホームページにて受け付けます。ホームページの「イベント・展示会情報」をご覧ください。

○問合せ先 総務部総務課広報係

電話 03（3581）2331（代表）

第24回図書館総合展2022 ONLINE plus（主催：図書館総合展運営委員会）

・期間 11月1日（火）～11月30日（水）

・会場 図書館総合展公式ウェブサイト／サテライト会場／カンファレンス会場

# NDL Topics

## 令和4年度 アジア情報研修

アジア情報の収集・提供に関するスキル向上を図るとともに、アジア情報関係機関間の連携を深めることを目的として、令和4年度アジア情報研修を行います。昨年度に引き続き、日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所と共催で実施します。

○日時 令和4年12月1日（木）～2日（金）

○会場 国立国会図書館関西館第一研修室

ただし新型コロナウイルス感染拡大等の社会情勢によってはWeb会議システム（Cisco Webex Meetings）によるリモート開催に変更します。

○対象 各種図書館、調査・研究・教育機関、中央省庁・地方公共団体等に属する方、大学院生等。

\*主に日本語・朝鮮語の情報源を扱います。

○定員 20名（原則、1機関につき1名）。応募多数の場合は調整します。

○テーマ 韓国を調べよう！ ～法令と統計～

○内容（予定）

12月1日（木）13時15分～17時40分

科目①「法令を調べる」（関西館アジア情報課

講演「韓国の社会経済データの収集と分析」

（講師 渡邊雄一氏（アジア経済研究所）

12月2日（金）9時30分～12時25分

科目②「統計を調べる」（アジア経済研究所 学術情報センター）

\*「科目①」「科目②」は、実習を行います。

\*受講者の方には、事前課題にご回答いただきます。

○参加費 無料

ただし、旅費、滞在費等、リモート開催の場合の通信費等は受講者にご負担いただきます。

○申込方法 アジア経済研究所ウェブサイトの左記のページからお申し込みください。

「アジア情報研修 韓国を調べよう！ ～法令と統計～」

[https://www.ide.go.jp/Japanese/Event/Library/20221201\\_kensyu.html](https://www.ide.go.jp/Japanese/Event/Library/20221201_kensyu.html)

\*申込受付後にお送りする確認メールが届かない場合は、左記までお電話ください。

○申込期限 令和4年9月30日（金）

\*参加の可否は、令和4年10月5日（水）までにお知らせします。

○問合せ先

日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所学

術情報センター 図書館情報課情報サービス班

電話 043（299）9716

電子メール [aislib@de.go.jp](mailto:aislib@de.go.jp)

## 資料のデジタル化に伴う原資料の利用休止について

国立国会図書館では、所蔵資料の保存と利用の両立を図るためデジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。このデジタル化作業のため、次のとおり一部の資料の利用を休止します。

○利用休止予定期間

令和4年9月6日（火）～令和5年3月31日（金）

国際子ども図書館所蔵の和図書 約1.4万冊

（昭和44年から昭和51年までに刊行された和図書の一部）

※ご利用いただけない資料は、国立国会図書館オンラインの書誌詳細画面の所蔵一覧で、「作業中 デジタル化のため」の表示でお知らせします。事前に検索してご確認ください。

※詳細については左記に掲載しています。

国立国会図書館ホームページの資料の保存・資料デジタル化について・デジタル化作業に伴う資料の利用休止について

ご不便をおかけしますが、国民共有の文化的資産を後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

# NDL Topics

## 令和4年度国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との懇談会

6月30日、標記懇談会が開催されました。この懇談会は、国立国会図書館と公共図書館との協力の推進を図ることを目的として開催され、今年で57回目となります。新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点からオンライン形式により行い、都道府県立及び政令指定都市立図書館62館が参加しました。

初めに、朝倉博美文部科学省総合教育政策局地域学習推進課図書館・学校図書館振興室長が、最近の図書館行政の動向について報告を行いました。続いて、今年度の懇談会のテーマ「地域のデジタルアーカイブへの取組」の下、当館から大場利康電子情報部長が、地域資料のデジタルアーカイブの意義、具体例、活用事例、構築・提供の課題、ジャパンサーチとの連携について報告しました。



令和4年度国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との懇談会

懇談会の後半では、9つのグループに分かれ、オンライン会議システムの機能を使ってグループ懇談を行い、各館でのデジタルアーカイブの取組の紹介や課題について意見交換を行いました。その後、各グループから懇談内容の発表を行いました。どの館も抱える共通の課題として予算と人員の問題が挙げられる一方、地域資料に産業や観光等に関連した価値付けを行い、地域の魅力発信につながるデジタルアーカイブを構築すること、地域資料として災害に関する資料のアーカイブ化を進めていくことが地域への大きな貢献となること、利活用促進に向けた他機関との連携やオープンデータ化の重要性等について発表がありました。



# 31 関西館 南側から見た書庫棟

## 新刊案内

### 令和3年度国際政策セミナー報告書

「米中対立下における米国の経済安全保障政策と国際経済秩序」

米国の経済安全保障政策と国際経済秩序  
日米の経済安全保障



A4 48頁 不定期刊 ISBN 978-4-87582-898-3  
以下のページからPDFファイルをご覧いただけます。  
[https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_12311657\\_po\\_202202.pdf?contentNo=1](https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_12311657_po_202202.pdf?contentNo=1)

## 外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第292号

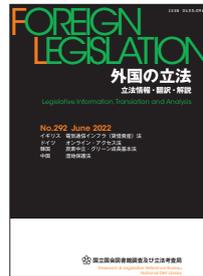
2021年電気通信インフラ（貸借資産）法—イギリスのギガビット級ブロードバンド推進に向けた課題と取組—

ドイツにおけるオンライン・アクセス法—行政サー

ビスの電子化とポータルネットワーク—

韓国の気候変動対策に関する立法と政策

中国の湿地保護法



A4 134頁 季刊 1,980円（税込）  
ISBN 978-4-87582-897-6  
発売 日本図書館協会

## レファレンス 858号

—の法律案に対する複数の修正案をめぐる二つの問題  
諸外国の人権侵害制裁法

英国の大臣規範—2010年以降の改定を中心に—  
国際法における領域の「実効支配」



A4 98頁 月刊 1,100円（税込）  
発売 日本図書館協会

## レファレンス 859号

ふるさと納税の受入れと地方公共サービスの便益

—ヘドニック・アプローチに基づく政策効果の評価—

農業における雇用労働力—背景・経緯・概況—

河川空間の活用をめぐる経緯と現状

経済のデジタル化に伴う国際課税ルール見直しの動向

—デジタル課税とグローバル・ミニマム課税の新たな枠組み—



A4 107頁 月刊 1,100円（税込）  
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

# 9/10

NATIONAL  
DIET  
LIBRARY  
MONTHLY  
BULLETIN  
2022.9/10

NO.737/738

SEPTEMBER/OCTOBER  
2022

## CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>  
*Nihon konchu daizukan: A search for insects*
- 04 A memory of Keihanna Science City by MORIMI Tomihiko
- 10 20th anniversary of the Kansai-kan
- 12 Reviewing the changes of the Kansai-kan in the last 20 years
- 16 Discussion: Tidbits about the Kansai-kan
- 22 Kansai-kan in maps: Past and present of Keihanna Science City
- 28 Working at the NDL, Season 2 Episode 10 (final installment)
- 32 Exhibition in the Kansai-kan (30) commemorating the 20th anniversary of the Kansai-kan  
What is in the giant stacks?: Review of the exhibitions in the Kansai-kan
- 27 <Tidbits of information on NDL>  
The cover is the face of the magazine
- 34 <Books not commercially available>  
*Muography: 21seiki no toshi zuho*
- 35 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和4年9/10月号 (No.737/738)

令和4年9月1日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 松浦 茂

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1  
電話 03 (3581) 2331 (代表)  
FAX 03 (3597) 5617  
E-mail geppo@ndl.go.jp  
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。  
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。  
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL  
D I E T  
L I B R A R Y  
M O N T H L Y  
B U L L E T I N  
2022.9/10

 国立国会図書館  
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士